大手前大学論集　第16号（2015）pp. 89－124

怪奇小説におけるハンセン病の肖像
― 幸田露伴『対髑髏』[1]を中心に[2]

The Representation of Hansen's Disease in Supernatural Tales:
With Special Attention to Kōda Rohan's *Encounter with a Skull*

田中キャサリン
Kathryn M. Tanaka

要　旨

幸田露伴『對髑髏』（1890年）は、ドイツ語や英語でも翻訳出版されているにもかかわらず、欧米でも日本でも露伴の他の作品に比べると研究はわずかである。まず、本作は、単純なプロットでありながら、古語による文体が用いられ、古典作品からの引用も多く、仏教思想や中国哲学の参照を要請する緻密な言語で構成されている。本作は浪漫主義・神秘主義の作品として分析されてきたが、作中のハンセン病（癩病）描写は、現代社会の寓意として理解することができる。その他の作品においても、文学作品でのハンセン病描写は、病気や帝国主義における不安と解釈することでより広範な意味を持つ言説と見なすことができる。続いて、ロッド・エドモンドの画期的な研究は、ハンセン病と帝国主義の関係を論じ、1890年代～1930年頃のイギリス文学におけるハンセン病表象には、植民地が帝国にもたらす脅威への不安が反映されることがあると実証してきた。エドモンドの研究をふまえ、本論は西洋と日本における幽霊譚を描く怪奇小説を比較し、それらの共通点および相違点、そしてその寓意に注目し、作品におけるハンセン病患者表象の重要性を論じる。西洋の作品としてコナン・ドイ

1　本論では、引用箇所以外、旧字はすべて新字に改めた。
2　本研究は、滋賀大学の阿部安成氏が担当している「大島連続講演会」での発表を基にしている。参加者の方々のご質問・ご指導に学び、加筆修正を行った。この場を借りて阿部先生と皆様に御礼を申し上げる。

ルやキップリングらの作品分析を行い、それらと『對髑髏』の比較を通じ、本論は露伴の『對髑髏』が現代の怪奇小説の原型であると捉え、露伴の革新性の考察を通じて、文学作品における病の役割や帝国観の一端を明らかにする。

Abstract

Koda Rohan's *Taidokuro* (*Encounter with a Skull*) (1890) has not been the subject of much scholarly attention in Western-language scholarship, although it has been translated into German and English. One reason for this neglect is the apparent simplicity of the plot coupled with the incredibly dense language, filled with references to Japanese classical literature, Buddhism and Chinese philosophy. Although the text has been analyzed as a work of Romantic Mysticism, Rohan's depiction of Hansen's Disease (leprosy) in this tale can be understood as a modern social allegory. His depiction of Hansen's Disease was in dialogue with broader discourses of disease and imperial anxiety. Rod Edmund has demonstrated the ways in which Hansen's Disease was appropriated in literature to reflect anxieties of empires and threats to colonial centers in his groundbreaking study, *Leprosy and Empire*. Building on this, I discuss the significance of Hansen's disease as a common trope in Western and Japanese ghostly tales. I first analyze the innovations of Rohan's work in comparison to the way Hansen's Disease appears in other Japanese ghostly tales before I reveal the similarities and differences between the depiction of ghostly visitors suffering from Hansen's Disease in Rohan and the works of British authors such as Sir Arthur Conan Doyle and Rudyard Kipling, among others. Through this close examination of *Encounter with a Skull*, I draw attention to the play between archetype and innovation in this distinctly "modern" text and show how it operated within the context of global discourses of illness and empire.

キーワード：幸田露伴、怪奇小説、ハンセン病、英米文学

Keywords：Koda Rohan, supernatural tales, Hansen's disease,
English language literature

1．怪奇小説、ハンセン病と医学意識・社会構造変化

1860年代前半頃より、科学技術や機械の発展によって人々の生活様式や社会の様相は急速に変化していった。いわゆる「近代化」の過程であるが、様々な研究者によって近代化による人々の日常経験の変化が論じられている[3]。そしてこの近代化の過程における近代医学、近代教育、近代国家体制の登場などにより、怪談や超自然的な迷信は信用を喪失していった。しかし、ジェラルド・フィガルが『文明と妖怪―明治日本の近代精神』で論じた通り、超自然的な空想は近代化に必要な要素であった[4]。

多数の研究者が論じている通り、怪談や怪奇小説はその社会の人々が抱く恐怖や不安の映し鏡となる[5]。

これまで、文学研究においては幻想文学がどのように社会的・政治的な不安や恐怖を反映しているのかが分析されてきた。たとえば、ツヴェタン・トドロフの『幻想文学―構造と機能』は、超自然的な空想によって社会変動に対する不安や恐怖の表現の可能性が生まれると述べる[6]。言ってみれば幻想文学の中では既成の秩序を壊すことを通じて、社会慣習を打ち破り、社会批判を行うことが可能となるのである[7]。

マルクスの社会分析では、社会の基礎となるイデオロギーや国家の過去の亡霊が人間の社会的言動を拘束すると論じられている。その拘束から解放されるためには社会改革が必要とされる。社会改革には、もちろん革命のような劇的な社会変化を伴う場合もあるが、文学を通じて社会を過去のイデオロギーから解放する可能性が生じる場合もある。また、文学にはしばしば支配的なイデオロギーの変化に伴う社会不安が現れることもある。特に怪奇小説に登場する幽霊はこうした社会の変化や不安の象徴として描かれることが多い。

たとえば、マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』では、「人間は自分自身の歴史を創るが、しかし、自発的に、自分で選んだ状況の下で歴史を創るので

3　たとえば、木岡伸夫・鈴木貞美編『技術と身体―日本「近代化」の思想』（ミネルヴァ書房、2006）、栗山茂久・北澤一利編『近代日本の身体感覚』（青弓社、2004）、Stefan Tanaka, *New Times in Modern Japan* (Princeton University Press, 2004)、坪井秀人『感覚の近代　声・身体・表象』（名古屋大学出版会、2006）などでは、近代文化や技術が人間の身体的な体験に変化をもたらす様相が詳しく分析されている。

4　Figal, *Civilization and Monsters: Spirits of Modernity in Meiji Japan*, Duke University Press, 1999: p. 13.

5　三浦清宏『近代スピリチュアリズムの歴史』（講談社、1994）、Sasha Handley, *Visions of an Unseen World: Ghost Beliefs and Ghost Stories in Eighteenth-Century England* (Pickering & Chatto, 2007）など。両者のように怪談や超自然的な物語を分析し、それらが文化や歴史をどのように反映しているのかを検討した研究は多い。

6　Tzvetan, Todorov, *The Fantastic: A Structural Approach to a Literary Genre*, trans. Richard Howard (The Press of Case Western University), 1973, pp. 164-165.

7　同書、p. 165。

はなく、すぐ目の前にある、与えられた、過去から受けて渡された状況の下でそうする。すべて死なせる世代の伝統が、夢魔のように生きている者の思考にのしかかっている[8]」と書かれている。

マルクスの「夢魔」の思想に基づき、ジャック・デリダは『マルクスの亡霊たち』において怪奇小説は政治的な意味合いを持つと論じている[9]。デリダは、幽霊が登場する怪奇小説が描かれ、世に出ること自体に政治的な意味があると論じる。デリダはこの描写が「記憶の、相続の、世代（ジェネラシオン）＝生殖の政治学〈でも〉あることになるだろう」と述べる[10]。彼は小説で描かれる幽霊が戻ってくるという事象に政治的な意味を見出している。英語では幽霊がこの世に戻ることを Haunting というが、この言葉には二つの意味がある。一つは文字通り幽霊がこの世に戻ったという意味だが、もう一つには社会的に忘れられない歴史や意識という意味もある。デリダは、人間が作っていく歴史はまだ変化の途上にあるため、変化を受け入れないことによって「社会的に忘れられない歴史や意識」としての「幽霊」が戻ってくるというのである。そのような幽霊の表象は社会やイデオロギーの変化に対する不安の象徴とみなせることもある。

このような怪奇小説への政治的な解釈は、日本の明治期の怪奇小説を考える上でも非常に重要である。本論は、怪奇小説が政治的な意味を持つとする視点から論じてゆきたい。

このように怪奇小説を政治的な意味を持つとする視点から見ると、19世紀末から20世紀初頭にハンセン病が世界の大衆文学のモチーフになってきたことは非常に興味深い。これは19世紀末以降、世界が帝国主義時代に入ったことと深い関わりがある。多くの研究者が明らかにしているように、文学作品に描かれるハンセン病への恐れは帝国主義原理と関連している[11]。つまり、ロッド・エドモンドが論じた通り、「ハンセン

8　カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』植村邦彦訳。平凡社、2008、p. 16。
9　デリダ・ジャック『マルクスの亡霊たち』増田一夫訳（藤原書店、2007）。
10　同書、p. 13。
11　たとえば、Rod Edmund の *Leprosy and Empire*（Cambridge University Press, 2006）に加え、欧米の帝国主義発想とハンセン病のかかわりについては、Moran, Michelle T., *Colonizing Leprosy: Imperialism and the Politics of Public Health in the United States*（The University of North Carolina Press, 2007）、Gussow, Zachery, *Leprosy, Racism, and Public Health: Social Policy in Chronic Disease Control*（Westview Press, Inc., 1989）と Inglis, Keri, Ma'i *Lepra: Disease and Displacement in Nineteenth-Century Hawai'i*（University of Hawai'i Press, 2013）などがある。アジアにおける帝国主義とハンセン病対策については、Burns, Susan L., "From 'leper villages' to leprosaria: Public health, nationalism and the culture of exclusion in Japan," *Isolation: Places and Practices of Exclusion*, Carolyn Strange and Alison Bashford 編（Routledge, 2003: 104-118）、Anderson, Warwick, *Colonial Pathologies: American Tropical Medicine, Race, and Hygiene in the Philippines*（Duke University Press, 2006）、Leung, Angela Ki Che, *Leprosy in China: A History*（Columbia University Press, 2009）、廣川和歌『近代日本のハンセン病問題と地域社会』（大阪大学出版会、2011）や滝尾英二『朝鮮ハンセン病史―日本植民地下の小鹿島』（未来社、2001）などがあり、帝国主義とハンセン病の扱い方については、ハンセン病研究者によって複数の視点から明らかにされている。

病は、病気それ自身以上のものになり得る驚くべき可能性を持っていたように思える」(“Leprosy, it seems, has had extraordinary potential for becoming more than itself.”)[12]。言うまでもなく、このようなハンセン病を描く大衆文学の一部として怪奇小説があったのである。

何故ハンセン病は文学における重要なモチーフになったのか。当時、ハンセン病の原因は、近代医療と民間医療のいずれによっても不明であり、発症した場合には不治の病と見なされた[13]。その一方で、医学や医療技術もまた急速に発展しており、医学を大きな力を持つ技術だと信頼していた当時の人々は、その近代医学でも解明できないこの不治の病を無意識のうちに時代の不安や恐怖のシンボルとして扱っていった。それは日本だけでなく、世界中のハンセン病描写の共通点であった。だからこそ、19世紀末や20世紀初期に怪奇小説、探偵小説、紀行文、新聞記事等でハンセン病がますます重要な話題となっていったことは非常に興味深く思われるのである。ハンセン病表象からは、ハンセン病に対する同時代の医学的な認識だけでなく、当時の社会構造の変化や歴史との関連も読み取れる。故に、大衆文学におけるハンセン病表象は、二つの大きな役割を果たしていると言える。一つは、近代医学によってハンセン病への科学的な理解が進みつつあったとはいえ、当時の人々が抱いていた、ハンセン病の伝染方法や治療の可能性への曖昧な認識のありようを映し出す役割である。これは、怪奇小説よりも探偵小説にしばしば見られる。探偵小説では、このようなハンセン病の医学的な未解明性を利用し、ハンセン病をセンセーショナルな病として描くことが多い[14]。ただし、近代化によって変化していくハンセン病への医学的認識は怪奇小説にも見出すことができ、本論ではその点にも注目しながら論じていく。

だが、大衆文学におけるハンセン病描写の最も重要な役割は、社会構造の変化の渦中にある人々の不安や恐怖を反映しているということである。ハンセン病が近代を生きる人々の不安の象徴となった理由は、先にも述べた通りその病因が近代医学でも解明されなかったことにある[15]。ハンセン病の感染方法は、病原菌が発見される頃になっても明らかにできていなかった。どんな病も治すと思われた近代医学への信頼を急速に深めていた当時の人々にとって、伝統的医学でも近代医学でも説明不可能なハンセン病は、社会に対する不安の大きな象徴となっていったのである。それゆえ、エドモ

---

12 Edmund, p. 1.
13 現在、ハンセン病はMDTによって完治することも可能になった。
14 Susan L. Burns, “Making Illness into Identity: Writing “Leprosy Literature” in Modern Japan,” *Japan Review* 16 (2004): pp. 191-211と細川涼一の研究が探偵小説とハンセン病のメタファーについて詳しい。細川涼一「探偵小説とハンセン病—国枝史郎・小栗虫太郎・橘外男」(「仏教」(50)、2000、pp. 122-129) と同氏「ハンセン病と勃興期の探偵小説—正木不如丘と小酒井不木」(「部落解放」(495)、2002、pp. 40-49) が示唆に富む。
15 Edmund, p. 221.

ンドが論じた通り、英文学に描かれたハンセン病への恐れは、当時のイギリスの社会不安の一つであった本国人による植民地への恐れの反映と解釈できるのである。

さらに言えば、ハンセン病が登場する怪奇小説からは、その作品が書かれた社会にとっての「他者」をも理解できる。様々な作品に見出される「他者」としてのハンセン病患者は、それぞれ社会秩序を乱す恐怖を与える存在という点では同じだが、その意味は患者が外部から現れるか内部から現れるかで大きく異なってくる。本論では、このような怪奇小説における「他者」としてのハンセン病患者の立ち現れ方が持つ意味も分析していきたい。

これまでに大衆文学におけるハンセン病描写を取り上げた研究は非常に少ない。ロッド・エドモンドは、英国文学における紀行文のハンセン病描写について論じ、また、スーザン・バーンズは日本の文学や新聞におけるハンセン病描写の変遷を論じている[16]。ただ、ハンセン病と文学を関連させた研究では、1930年代後半から流行したいわゆる「癩文学」や「ハンセン病文学」のジャンルが中心的に論じられてきた[17]。加えて、主だったハンセン病に関する研究は、特定の国や宗教におけるハンセン病への考え方を検討していくものが多い。もちろんこのような視点は非常に重要だが、ハンセン病表象についてはさらに幅広い視点から検討する必要があると考える。それは、ハンセン病文学においては日本や欧米各国でほぼ同時期に類似した物語が現れており、このようなハンセン病文学の世界的な潮流を視野に入れ、各国の作品を比較検討することも、ハンセン病文学の理解に不可欠だと考えるからだ。ハンセン病が社会不安の象徴[18]として登場している点は各国に共通しているが、その不安の起源は日本と欧米で大きく異なる。本稿ではそれを検討し、さらにその過程でもう一つの共通点にも注目していきたい。ハンセン病を扱う怪奇小説は多くはないが、それらが見直される必要があると考えるのは、そのもう一つの共通点があるためである。

英米文学と日本文学のいずれにおいても、ハンセン病描写が社会秩序や国の境界線を揺るがす存在の象徴として登場しており、その根底には、近代医学によるハンセン病に対する共通の認識がある。帝国主義によって発展した熱帯医学において、ハンセン病は大きな話題となっていたが[19]、どの国でも、1890年代に始まるハンセン病描写は、

16　Tanaka Kathryn, “Through the hospital gates: Hansen’s Disease and modern Japanese literature,” Doctoral dissertation, University of Chicago, 2012.

17　「癩文学」と「ハンセン病文学」の相違については、Tanaka Kathryn, “Through the hospital gates” と同「ロイス・ジョンソン・エリクソン夫人と長田穂波―キリスト教宣教師と癩文学の普及」（『大手前大学論集第15号』、2015年）を参照。ハンセン病文学はプロミンという特効薬が発明されてから発表された作品を指し、治療が可能になったことによって文学作品の方針も大きく変わったことを指摘している。

18　ソンタグ・スーザン『隠喩としての病い；エイズとその隠喩』富山太佳夫訳、みすず書房、2012。ソンタグは結核とがんにエイズを加え、病気がどのように隠喩となるのかを明らかにした。

19　Gussow, pp. 111–116; Edmund, pp. 221–224.

多くの場合「伝染性」や「誰にでもうつる」病気という共通の認識の元になされていた。これまで典型的な近代の病として様々な研究者が論じてきたのは結核であったが[20]、むしろハンセン病の方が、近代医学やいわゆる熱帯医学、また多数の国の政府による健康政策[21]や隔離政策[22]の対象とされてきたことを考えると、結核よりもハンセン病の方がより近代の病と呼ぶにふさわしいのではないだろうか。超自然的な怪奇小説では、何よりもこのようなハンセン病への医学的な認識の変化が映し出されている。それは、前述したように、怪奇小説が社会変化の鏡だと考えられるからである。そして、そのような世界で共通したハンセン病の病原への認識のありようが明らかにされる点で、ハンセン病を描く怪奇小説を見直すことは重要なのである。ただし、このハンセン病への医学的認識には国による相違もある。欧米文学において、ハンセン病は間違いなく伝染病として扱われていた。しかし、日本文学では、日本の伝統医学、近代医学、民間で流布していた健康にかかわる病の認識と同じように、病原に対する伝染と遺伝との病原への認識の混乱が文学作品にも反映されていると考えられる。

スーザン・バーンズは、日本の文学作品や新聞においてハンセン病がどのように利用され、ハンセン病への医学的な認識の変化を映し出していったかを詳しく検討した[23]。バーンズによれば、探偵小説では、ハンセン病に対して「近代医学的意識」から「伝染病である」という認識がなされた一方で、伝統的な医学の見地から遺伝病とする認識も存在していたことがうかがえるという[24]。日本の場合、ハンセン病患者は当人が不道徳な行為を行った結果としてかかる病であり、その子孫もまた発端となった発病者の不道徳な行いによって罹患することになると思われていた[25]。

---

20 結核のメタファーについてはソンタグの研究が最も知られている。ソンタグに加え、福田眞人『結核の文化史』（名古屋大学出版会、1995）、柄谷行人「病という意味」『定本　柄谷行人集』第一巻（岩波書店、2004、pp. 133-155）や William Johnston, *The Modern Epidemic: A History of Tuberculosis in Japan*（Harvard University Press, 1995）などが、日本における結核の文化的なメタファーや意味を分析している。

21 政府によって作られた健康に関わる法律については多くの研究がある。ハンセン病と健康政策については廣川和歌の研究が最も詳しい。政策と国民の健康については、Frühstück, Sabine, *Colonizing Sex: Sexology and Social Control in Modern Japan,*（Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 2003）や Michael Bourdaghs, *The Dawn That Never Comes: Shimazaki Toson and Japanese Nationalism*（Columbia University Press, 2010）も社会と国民の健康について分析している。そして、新村拓『健康の社会史―養生、衛生からの健康増進へ』（法政大学出版局、2006）、小林丈広『近代日本と公衆衛生―都市社会史の試み』（雄山閣出版、2001）や宝月理恵『近代日本における衛生の展開と受容』（東信堂、2010）なども、近代的な「国民」の構想の過程に国民の健康がどのように関わってきたのかを分析している。

22 廣川和歌の研究によって「隔離政策」の誤謬が明らかにされた。

23 スーザン・バーンズは大衆メディアとハンセン病の病原論理の変更を分析している。“Rethinking “Leprosy Prevention:” Entrepreneurial Doctors, Popular Journalism, and the Civic Origins of Biopolitics,”（*Journal of Japanese Studies* 38（2）2012: pp. 301-327）を参照。

24 廣川がハンセン病に対する医学意識と伝統的意識の様相を明らかにした。地域によるハンセン病の扱われ方の相違も検討されており、政府によるいわゆる絶対隔離の誤謬を明らかにしている。

25 Burns, “Making Illness into Identity,” pp. 187-196.

しかし、このような発想は日本だけのものではない。欧米文学の中にも、登場人物が不道徳な行為の結果としてハンセン病にかかったと描く作品がある[26]。日本文学では、ハンセン病罹患の原因となる不道徳行為を性欲に関わるものとする作品が多い。しかし、英国文学では、異常な性欲によってハンセン病にかかる描写はないわけではないが、大抵ハンセン病は植民地の原住民族の危険性の象徴として描かれることが多い[27]。

以上をふまえ、本稿では、大衆文学におけるハンセン病表象が担う意味への注目を起点とし、特に幸田露伴の『対髑髏』を中心的に取り上げ、日本の怪談・怪奇小説の中に現れるハンセン病患者の表象が持つ意味を同時代の社会の文脈に置いて考えていく。さらに、本稿では、日本の怪奇小説の役割を、欧米文学とも比較しながら分析していきたい。文学作品におけるハンセン病表象の特徴として世界的に共通しているのは、近代化や帝国主義に傾倒する国家への不安の表現として現れている点である。しかし本稿では、日本の怪奇小説や怪談におけるハンセン病表象は、幸田露伴作品も含めて、国内から現れ、社会秩序を乱す脅威の象徴として登場することを明らかにする。つまり、日本の怪奇小説に登場するハンセン病患者の登場人物は、多くの場合社会秩序を乱す恐れのある他者として描かれていると解釈できることを論証する。

2．明治文学とハンセン病

日本文学におけるハンセン病表象は怪奇小説よりも探偵小説に登場する方が多く、そこでのハンセン病は犯罪とともにセンセーショナルな形で描かれている[28]。たとえば、江戸時代のハンセン病を描く怪談には「人の魂、死人を喰らふ事　付精魂、寺へ来たる事」（『片仮名本・因果物語』1661）[29]や「鼠、人を食ふ事」（『宿直草』1677）[30]がある[31]。「鼠、人を食ふ事」では、ハンセン病患者が鼠に食べられて死んでしまう。他

26　とくに、欧米文学においては社会に認められない不道徳な恋愛や性欲がハンセン病と繋がりがあるかのように描かれている。たとえば、ホモセクシャルがハンセン病にかかる作品もある。同性愛とハンセン病については、Tomso, Gregory. “The Queer History of Leprosy and Same-Sex Love.” *American Literary History*, 14.4 (2002) : pp. 747–775が詳しい。また、Edmund もハンセン病が罪に対する罰として描かれている例を複数分析している。

27　Edmund, p. 221。

28　スーザン・バーンズが探偵小説におけるハンセン病のセンセーショナルな描かれ方についていくつかの例を挙げている。“Making Illness into Identity” を参照。また、本稿の付録や荒井裕樹・山下道輔『「癩」を扱ったミストリー小説～戦前編～』（国立ハンセン病資料館所蔵、2004）も参照。

29　高田衛編・校注『江戸怪談集（上）』［全３冊］山容社、1989、pp. 120–121。

30　高田衛編・校注『江戸怪談集（中）』［全３冊］山容社、1989、pp. 178–180。

31　鈴木晃仁のブログによってこれらの怪談を知る機会を得た。「『江戸怪談集』より精神医学史・医学史関連のメモ」http://akihitosuzuki.blog.fc2.com/blog-entry-2637.html（最終閲覧日：2016年２月21日）を参照。

方、「死人を喰らふ事」ではハンセン病患者は治療のため人肉を食べるのがよいとする迷信が描かれている。ハンセン病が「人肉食」によって治るという迷信は、明治時代のメディアにおける報道の中でも衝撃的な出来事として取り上げられている[32]。

この傾向は、いわゆる毒婦の高橋お伝から始まったと言ってもいいだろう。1879年、お伝が古物商の後藤吉蔵を殺した罪で逮捕され死刑を受けたことは、当時の新聞においてセンセーショナルな事件として扱われた。当時の新聞や大衆文学によれば、お伝は夫の波之助がハンセン病だった事がきっかけで犯罪に手を染めたとされている[33]。1880年代にはお伝の伝記が数編出版されたが、この伝記では波之助がハンセン病患者だったため、高橋夫妻は治療をするために群馬の実家を出て横浜へ向かったとされている。また、仮名垣魯文による小説では、お伝は波之助の治療費が高すぎたために彼を殺し、それが彼女の罪深い人生の契機となったと書かれている。実際にお伝が波之助を殺したかどうかは別にしても、そこでは波之助のハンセン病がお伝を犯罪に向かわせたように描かれている。また、魯文の『高橋阿伝夜叉譚』では、お伝が波之助をも殺したと書かれている。同作では、図一に見られるように波之助のハンセン病の様子が具体的に描かれている[34]。

32　1902年に東京府麹町区下二番町で起きた未解決殺人事件が報道されている。「臀肉事件」と呼ばれたが、殺された少年の尻から肉が切り取られていたことで非常にセンセーショナルなニュースとなった。野口男三郎という男が逮捕され裁判が行われた。野口はこの事件に加えて他に二つの殺人事件（義兄の漢詩人として有名な野口寧斎（1867-1905）の殺害と近所の薬局の主人の殺害）の容疑者となった。結局、少年と義兄の殺害に関しては証拠がなかったが、薬局の主人の殺害で有罪と判断され、死刑となった。当時のメディアによると、野口寧斎はハンセン病を患っており、男三郎はその治療に人肉食が効くと信じ、義兄に人肉を食べさせた上、妻のサエにも発病を防ぐため食べさせた。しかし効果はなく、薬局の主人への借金も抱え、返済できなかったために殺したという。この事件の報道において興味深いのは、ハンセン病に人肉食が効くという迷信が日本の植民地であった朝鮮から伝わったと記録されている点である。Tanaka, “Through the Hospital Gates,” pp. 70-72。

33　Marran, Christine L. Marran, *Poison Woman: Figuring Female Transgression in Modern Japanese Culture*, (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2007), p. 5. また、Mark Silver にも明治文学における犯罪の著書がある。*Purloined Letters: Cutural Borrowing and Japanese Crime Literature, 1868-1937*, (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2008) を参照。

34　仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』（東京堂、1926）。

図一[35]

図一はいくつかの点で注目される。まず一つは波之助の姿である。この絵では頭髪がなくなり発疹が出るというハンセン病患者の特徴が見て取れる。それに対し、お伝は口を隠して団扇で自分の身を守り、波之助に近づかないようにしているように描かれている。二人の周囲の傷んだ襖や壁は彼らの経済的な困窮を表している。しかし、その中でもお伝だけが立派な着物や帯を身に着けているのは、室内や波之助の様相とは対照的である。当時の新聞記事や大衆文学において、お伝は邪悪な毒婦として描かれていたが、特に魯文の作品では、ハンセン病がお伝の欲望と罪に起因するものとして描写されている。そこでのお伝は、逮捕されるまで罪を重ね続けている。最終的にお伝という女性の危険性は、政府による逮捕と死刑によって無力化されることになる。ここではハンセン病のモチーフが女性の危険性を喧伝する媒体にもなっていたと言えるだろう。

魯文の作品の中では、ハンセン病の病原を遺伝とする意識には勧善懲悪の論理が働いている。『高橋阿伝夜叉譚』の第九回の最後で波之助は病気になり、医師に「悪血餘毒に混じ俄に發せし世にいふ癩病の種類にて後には面部支體まで腐敗すべき難病なり逸く治療に手を盡さねば生涯廢れ者になるべきなり」と診断される。[36] ここでは病原が腐った血、つまり、「悪血」と捉えられ、いわゆる「天刑病」と見なされており、

35　同書、pp. 102-103。
36　同書、p. 70。

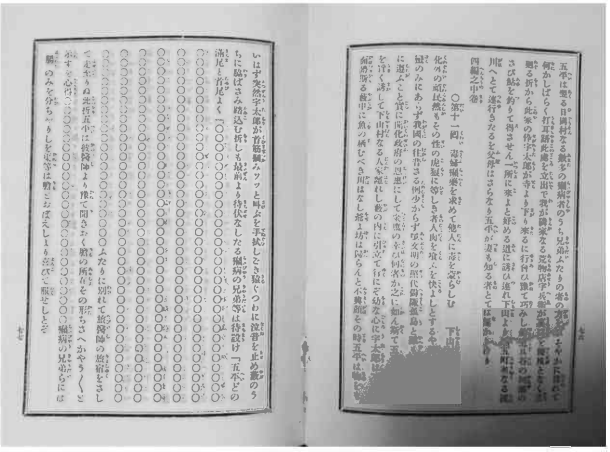
伝染病とする認識は全く無い。また、第十回の初めに、三人称の全知の語り手はハンセン病についての認識を以下のように述べる。

> 「抑も癩病を天刑病と號くるは往昔より此病ひの治し難きに支那の名醫も匙を投げ是全く天の刑罰する所にして百薬効なく醫療驗しなし斷全治療に手を下すの醫家ひとり支那のみならず格物究理の歐羅巴諸国といへどもその方を究めし者なかりしに我日本小國にして此大難治の病ひを癒すの實効を全くする者は現今府下小川町猿楽町起癈病院長兼癩病院幹事後藤昌文先生にして先生此病ひを治するの方を発明せられその功を奏せし事は記者が前に著したる起癈病院醫事雑誌を読て知らん」[37]

ここでは、ハンセン病は天刑病でありながらも医学によって治療できるようになったとされている。また、後藤昌文は当時ハンセン病の名医とされ、バーンズも述べていたように、彼の「治するの方」は多くの医師やハンセン病患者に認められており、ハワイなどへも治療方法を教えに行くなど、人々から高い信頼を得ていた[38]。後藤の名を出すことによって、作品の信頼性も高まったであろう。先のような記述を参照すると、「悪血」や「天刑病」といった病原に対する認識もあくまで科学的な視点からなされていることが読み取れるだろう。

しかし、『高橋阿伝夜叉譚』においてハンセン病によって罪を犯したのはお伝だけではない。同作の中では、お伝を中心とする主なストーリーの他に、三つの挿話が語られる。ここで注目したいのは、お伝が波之助を殺してから語られる挿話である。第十回から作品の舞台は甲斐国の下山にあるハンセン病患者の村に設定されており、そこでは安衛門という人物が語り手になってお伝に五平という男の挿話を語り出す。安衛門によって、五平は残忍な賭博師で、村の医師に殺人教唆を頼まれる。医師は、主人の息子がハンセン病を患っており、幸運の日に生まれた宇太郎という少年の肝臓を食べなければ完治することは無いことを語る。そして五平が宇太郎を殺すならば「千萬金を出す」と約束する。五平は金欲しさに、二人の「癩病の兄弟」の援助を得て宇太郎を山に連れていく。魯文は宇太郎の殺人の場面を恐ろしく詳細に描写している[39]。明治に出版された本作のこの場面は、1926年に出版した本では検閲されて、以下のようにすべて伏字になっている。

37　同書、p. 71。
38　Burns, “Rethinking “Leprosy Prevention:” Entrepreneurial Doctors, Popular Journalism, and the Civic Origins of Biopolitics,” pp. 301–327.
39　仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』、pp. 76–77。



図二[40]

魯文はなぜこれほどまで事細かに殺人事件を描いたのか。最終的に医師が主人のためではなく、五平と同じく金銭のために罪を犯した。五平や医師は金銭によって行動を起こしたが、「癩病の兄弟」が宇太郎の殺人に手を貸したのはハンセン病の治療のためであった。ここには、ハンセン病は非常に恐ろしい病であったため、患者はどんな罪を犯してでも治療の手段を求めるという認識がある。つまり、この挿話にはハンセン病は人間を絶望させ、犯罪をも引き起こすという認識が表れている。挿話の顛末として、医師は逃げおおせたが、「癩病の兄弟」と五平は逮捕され死刑となった。「癩病の兄弟」の死刑によって、ひとまずハンセン病への恐れは収まったと言えるだろう。このように、『高橋阿伝夜叉譚』を始めとする高橋お伝の物語からは、明治後期におけるハンセン病の病原や治療法に対する認識が読み取れる。毒婦高橋お伝の物語が人気を得たのと同時期に、ハンセン病が新聞紙上で話題となっていた。江戸時代にはハンセン病の原因は血の汚れと考えられていた。血が汚れる原因はいくつかあるとされたが（油分の多い物の食べ過ぎや性交のし過ぎ、酒の飲み過ぎなど）、一度血が汚れればそれは親から子へ受け継がれる、つまり遺伝病になるという流言が広がっていた。また、当時、日本におけるハンセン病は特にハンセン病が性交のし過ぎにより罹患すると考えられていたことから、ハンセン病は特にセクシュアリティに関する危険性と恐怖の反映としての役割を担いつつあったと考えられる。このように江戸時代から、ハンセン病が遺伝病と伝染病のいずれなのか、そしてその原因が何なのかは不明とされていたのである。

明治時代になると医学制度も変わったが、民間医療でも近代医学でもハンセン病は

40　同書、pp. 76-77。

原因不明とされ治療することができなかった。このようにハンセン病がいかなる医学によっても原因を説明できなかったからこそ、ハンセン病表象は近代化過程における社会不安の反映となっていったと言える。

このようなハンセン病を扱う小説の中で、明治政府によるハンセン病に対する法律制定以前に発表された作品は三編とされている。その一つが露伴の『対髑髏』だが、同じく1890年に出版された尾崎紅葉の『巴波川』もまたハンセン病が描かれた作品と見なされている。しかし、筆者は『巴波川』をハンセン病を描いた作品とすることに疑問を抱いている。『対髑髏』は明らかにハンセン病患者を描いているが、『巴波川』で描かれる病はハンセン病というよりも、性病や精神病など他の遺伝病と見る方が妥当ではないかと考える。ハンセン病と解釈することも可能ではあるが、ハンセン病の病状を生々しく描く『対髑髏』とは異なり、『巴波川』の病状の描写は曖昧でハンセン病と断定するのは難しい。その点から言えば、『巴波川』と比べて明確にハンセン病を描く『対髑髏』は突出した作品だと言えよう。

この二作に加え、1899年には生田葵山『団扇太鼓』がハンセン病に罹患した子どもを描いたが、本作は家族の悲劇を描いた作品であって、本論で対象としている怪奇小説ではない。1890年代の日本で書かれたこれら三作は、従来のハンセン病文学研究では現世の辛苦と悲劇的な運命を描いた作品と解釈されている[41]。しかし、露伴の『対髑髏』の場合は、作中でのハンセン病の役割をより注意深く分析する必要があると思われる。

41 「『らい文献目録　社会編』等のリスト」『日弁連法務研究財団ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書　資料編』2005。

3．幸田露伴『対髑髏』を読む

高橋お伝の物語におけるハンセン病の扱われ方も特異であったが、幸田露伴による『対髑髏』もまた露伴の多数の作品の中でも特殊な作品と見なされている[42]。本作は最初に『縁外縁』という題名で明治23年（1890）１月から３月まで雑誌『日本之文華』に連載された。作では病名は一切書かれないが、仏教的な観点や社会動向から考えてハンセン病と解釈する研究者が多い[43]。また、河盛好蔵はハンセン病と考える理由を以下のように述べている。

> 作中の悪疾の女性は、露伴が友人高橋太華の谷中の家を訪う途中、しばしば路上で見かけたものからの想像であると云えられているが、この小説の書かれた頃は、ハンセン病はまだ遺伝する不治の天刑病と信じられ、そのために多くの悲劇を生んだ時代である。救癩の事業もまだ殆んど手を着けられず、癩を病む乞食の姿が神社仏閣などの境内に絶えず見受けられた。加うる露伴の友人のなかにも野口寧斎[44]のような悪疾に悩む人がいた。露伴がお妙を癩を病む女に仕立てたのは深い寓意があってのことと私には考えられる。その意味で、この小説はわが癩文学の先蹤をなすものであろう[45]。

本論は河盛の見解とは異なり、露伴は『対髑髏』をハンセン病文学としてではなく、ハンセン病のイメージや意味をシンボルとして使ったと考えている。しかし、河盛が本作をハンセン病文学とみなしたことやお妙の描写から考えると、露伴が本作でハンセン病を描写したことは確かだと考えられる。そして、本作がハンセン病を描いているのであれば、そこでどのような意味や可能性が生まれているのかを分析していきたい。

本作が発表された1890年という時期は非常に重要である。日本では1907年までハンセン病が法律による統制を受けていなかったため、『対髑髏』が発表された1890年代はハンセン病に対する人々の恐怖心が高まる以前の時期だと言える[46]。20世紀初頭以降のハンセン病問題への関心の高まりに伴い、1920年代になるとハンセン病を扱う探偵

42　出口智之『幸田露伴の文学空間―近代小説を超えて』（青簡舎、2012）が本作のみは露伴が何回か書き直したことを証明している。特に、同書 pp. 29-33に詳しい。

43　たとえば、関谷博「初期露伴の文学的課題」『幸田露伴集　新日本古典文学大系　明治編　22』（岩波書店、2002、pp. 538-539）や秦重雄『挑発ある文学史　誤読され読ける部落/ハンセン病文芸』（かもがわ出版、2011、pp. 293-295）などはハンセン病として扱っている。

44　野口寧斎については、本論の註31を参照。

45　河盛好蔵「幸田露伴集解説」『幸田露伴集　日本近代文学大系　第６巻』角川書店、1974、pp. 20-21。

46　Burns, “Rethinking “Leprosy Prevention”, pp. 299-300.

小説や自然主義小説、感傷主義小説などが現れてくるが、『対髑髏』はハンセン病を扱った小説としては最も早く、ハンセン病の描写が非常に生々しい点でも他の作品とは一線を画す。さらに、日本文学においてハンセン病を扱う怪奇小説は現在まで『対髑髏』以外に見つかっていない。その点で『対髑髏』の考察には大きな意義があると言える。

ところで、露伴は日本文学において重要な役割を果たした作家であるにも関わらず、外国からは見落とされている。これにはいくつかの理由があると考えられる。まずは言語的な問題である。露伴の散文は非常に難解で、漢字の多用や古語による文体、体言止めの使用が翻訳を困難にしていると思われる。その上、仏教思想や中国哲学の思想を非常に多く参照しながら書かれていること、だじゃれ、ことわざなどの多用、そして欧米文学の影響も見受けられるメタファーを始めとする比喩的表現も翻訳を難しくしていると考えられる。

また、会話の場面においても、『対髑髏』で例を挙げれば、お妙の台詞と主人公「露伴」や作者「露伴」の言葉が混ざったり、話し手が急に変わったりするため、注意深く読まなければこのテクストを十分に理解することは難しい。日本語よりもかえってドイツ語訳や英語訳で読むほうが読みやすいとさえ思われるほどである。しかし、そのような翻訳上の問題を抱えてなお、現在まで露伴作品のほとんどが外国向けに翻訳されていない中、『対髑髏』は英語にもドイツ語にも翻訳されているのである[47]。『対髑髏』は露伴作品の中でもあまり注目されていないように思われるが、海外からも注目されるべき価値ある作品だと考えられる。

関谷博は、『対髑髏』におけるハンセン病を次のように解釈している。

> 謡曲から舞台設定・構成を借り、また『風流仏』と同様、仏語を駆使して聖/俗、真/迷、さらに浄・不浄という概念をその上にかぶせて、精神の自由、その絶対性・超越性（髑髏の視座）を描こうとしたもので、みごとな文学的様式美と、美/醜のコントラストの鮮やかさ（中略）髑髏の超越性を強調しようとする目的で、現世の苦の象徴として、一疾病を利用した。
>
> 作品成立当時、癩＝ハンセン病は、まだ有効な治療がなく、「浮浪癩」としての生を生きる者が多かったのは事実である（中略）癩者に対する殊更な差別が、露伴にあったとは思わないが、しかし、彼が己れの文学的欲求の為に、癩を現世の苦の象徴として選んでし

47　英訳の“Encounter with a Skull”は *Pagoda, Skull, and Samurai: Three Stories by Koda Rohan*, trans. Chieko Irie Mulhern, (Charles E. Tuttle Company, 1985), pp. 111-148に掲載されている。ドイツ訳の“Begegnung mit einem Totenschädel”は Begegnung mit einem Totenschädel: Zwei Novellen aus dem Japan der Jahrhundertwende, trans. Diana Donath, (edition q, 1999), pp. 9-45。

まった誤りは、仏教自体が孕んでいた癩への偏見に抗する術を、露伴がもっていなかったことに起因にする。[48]

この見解は正しいが、本論は作中のハンセン病描写をさらに詳細に分析したい。まだハンセン病への恐怖心が高まる前の1890年に、露伴は何故『対髑髏』でハンセン病を題材としたのだろうか。それは、まだ国によるハンセン病政策の開始前ではあったが、既に新聞記事などではハンセン病への恐怖の高まりが見え始めていたからだと考えられる。また、外国文学を読み、翻訳も行った露伴が、外国の作品に登場するハンセン病表象に触れていた可能性もあり得る。

『対髑髏』については、露伴の他の作品に比べて研究が少ない。その理由の一つと考えられるのは、作品の単純なプロットが、膨大な量と密度の高い言葉をもって描かれ、日本の古典文学や、仏教、中国哲学などを参照した記述で埋め尽くされていることである。本作は非現実的な神秘主義的作品として研究されてきた。多くの研究者は、作中に見える仏教思想や中国思想に基づき、仏教説話的な物語として解釈している。[49]確かに本作には仏教や中国思想の影響が色濃く見られ、露伴はこのような作品によって「反近代」的とも批評されてきた。[50]しかし、本作は「反近代」的というよりもむしろ近代化の過程における社会変化や、それに対する人々の不安を非常によく映し出した作品と捉えられるのである。

まず、本作の内容を紹介したい。主人公の「露伴」（作者とは区別して読むべきだと考えられる）は、病気のため「中禪寺の奥、白根が嶽の下、湯の湖」で湯治を行っていた。病も癒えたため、主人公は白根山の旅館から次の街に向かおうと決心するが、山を越えるためには「魂精峠」を越えなければならない。宿の主人は彼を止めるが、主人公は臆病な都会ずれした人間と見られたくなかったので、どうしてもそこを通ろうと決意する。しかし、宿の主人の助言通り、出発後すぐに「魂精峠」を越える道程が非常に困難なものだと気づく。日が暮れて夜が近づき、主人公は夜までに山の向こう側の小川まで辿り着けないと悟る。その上、靴がだめになり、歩くことも難しくなってしまう。絶望を感じたその瞬間、彼は山の中で小屋を見つける。驚いた事にその小屋の住民は若く美しい女性（お妙）であった。図三は、露伴とお妙の出会いの場面を描いている。

48　関谷博「初期露伴の文学的課題」『幸田露伴集　新日本古典文学大系　明治編　22』岩波書店、2002、pp. 538-539。

49　Donath, Diana, “Buddhist and Daoist mysticism in Kōda Rohan’s works,” *Asiatische Studien: Zeitschrift der Schweizerischen Asiengesellschaft* 52（1998）, pp. 1059-1068と同著「幸田露伴の作品における哲学的思想と観念論」『實踐國文學　82』（2012、pp. 53-68）が露伴の思想に詳しい。

50　登尾豊『幸田露伴論考』（学術出版会、2006）などがこのような読み方の代表と言える。

周知の通り、山中の小屋に美しい女性に姿を変えた狐が住んでいるなどといった展開は、江戸時代の作品に典型的なものである。また、典型的な怪談と同じく、主人公はそこに一晩泊まることにする。このような展開は江戸文学だけでなく、泉鏡花の「高野聖」にも表れるパターンである[51]。本作の主人公も「…この女真実(まこと)に人間か狐狸(こり)か、先程より処置一々合点ゆかず。よしや狐狸(こり)にもせよ妖怪にもせよ、人間の形をなし、人間の言葉を交(まじ)ゆる上は人間と見るは至当(しとう)、其人間と共に眠らん事人間の道理にあるまじき事なり[52]」というような台詞をしばしば述べており、作者自身が本作を日本の怪談や妖怪譚を踏まえて書いたことがわかる。さらに、お妙は主人公の露伴の恐怖に気づき、笑いながら次のように述べる。「扨(さて)は妾(わたし)を妖怪変化(へんげ)の者かと思はれて夫程(それほど)までに厭(いや)がらるるなるべし、ホヽホヽ[53]」。ここではむしろ典型的な怪談を転覆させていると考えられる。

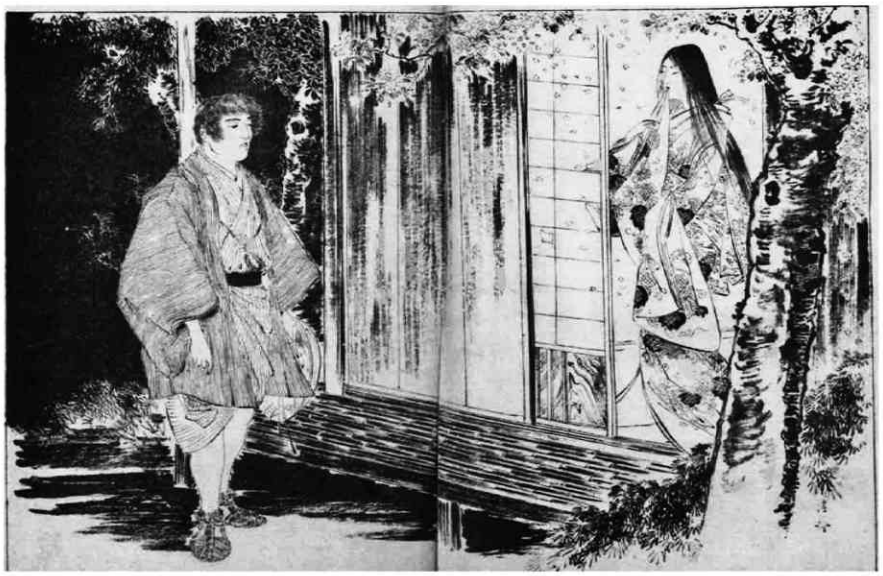
しかし、図三からは怪談の典型的な展開とは異なる点が見出される。主人公がやや「モダン」な雰囲気で描かれているのである。和服ではあるが、髪型や表情、特に瞼を見る限り、西洋絵画の影響も見出し得るような描き方がなされている。それに対して、お妙は日本の典型的な美女として描かれている。お妙の美しさと髑髏の醜さは関谷が指摘していた「美/醜」の対照の重要な一要素となっているが、加えて本作ではモダンと伝統も注目すべき対照関係をなしている。

主人公はこの美女の名前が妙（たえ）だと教えられる。この「妙」の字には「魅力」と「不思議」という二つの意味がある。お妙の名前が持つこの二つの意味は、図三の挿絵でも表現されている。図三ではお妙が非常に美しく描かれているが、同時にお妙の不安をかき立て不思議な印象を与える雰囲気も描き出されている。通常袖を噛むしぐさは悔しさなどの表現であることが多いが、この絵でのお妙の袖を噛む様子はそれよりも複雑な表現であり、そのしぐさから主人公が受けるであろう不安を読者に読み取らせる役割を果たす。袖を噛むしぐさだけではなく、破れかかっている障子とお妙の美しい姿の対比も不思議さを表現しており、さらにお妙の寂しい境遇も伝達していると考えられる。その上、小屋は古びているが、お妙の背後は明るく魅惑的に描かれている。この室内の明るさは主人公の背後の闇と対照をなしている。

51　安田義明「泉鏡花「高野聖」―露伴『対髑髏』との比較的論に」（滝川国文　12、1996、pp. 1-20）や徳田武「「対髑髏」と『雨月物語』・西鶴・『荘子』」（『明治大学教養論集172』1984、pp. 47-63）はこの典型への視座から本作を検討している。

52　幸田露伴『対髑髏』『幸田露伴集　新日本古典文学大系　明治編　22』岩波書店、2002、p. 267。

53　同書、p. 268。



図三[54]

お妙の家に泊まることになった主人公の露伴は、お妙に連れられた温泉で彼女に背中を流してもらい、旅の疲れを癒される。お妙は露伴に良い着物や夕食も用意し、寝具を貸して彼が休む準備まで行う。露伴は寝ようとしかけて布団が一組しかないことに気が付き、一人で布団を使うのはにべもないと思い、お妙と議論を始める。ここで露伴の山中の小屋での一夜は先行する同型の物語において典型的な展開とは異なったものとなる。露伴は自身の置かれた状況やお妙の不気味さ、そして性欲に負けたくないという気持ちもあり、お妙と共に寝るのではなく、彼女と一晩中話をすることになる。その後、お妙は露伴に乞われ、この小屋に住むことになった理由を語り出す。

お妙は前年に華族の若旦那からの結婚の申し込みを断っていた。お妙の母親は、死ぬ間際、お妙に彼女たち一家の呪いについて書いた手紙を渡していた。お妙はその手紙を読み、一生俗世間を離れ一人ひっそりと暮らすことを決意していたのである。主人公は手紙の内容を尋ねるが、お妙はそれに答えず、事の成り行きだけを述べてゆく。お妙が結婚を拒んだ華族の若旦那は、その後病にかかり死んでしまう。若旦那の死から７日後、彼の幽霊がお妙の前に現れ、お妙はその幽霊を追って山小屋にたどり着いた。お妙は、以前は不安や怒りを感じる事もあったが、小屋に来てからは運命を素直に受け止め、進んでそれに従うことが出来るようになったと言う。

54　『日本之文華』1890年１月上旬号、挿絵は頁番号記載なし。関谷博によれば、絵は後藤芳景（生没年未詳）によるもの。

話が終わる頃には夜明けが近づいており、お妙も小屋も消えてしまう。残ったのは白い髑髏だけであった[55]。主人公はその髑髏を土に埋め、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱え、一夜の話の礼を述べて人里に戻る。礼を述べる場面は『日本之文華』でも絵に描かれている（図四）。この場面ではお妙の美しさや魅力は完全に消え失せて、彼女の不思議さだけが残されていると考えられる。

その後、山の向こうの小川にたどり着いた露伴は、温泉宿の亭主に山奥で不思議な事が起こらないかと尋ね、前年にハンセン病にかかって気が狂った乞食の女が山に消えたという話を聞く。

図四[56]

55　中国文学では髑髏自体意味を持っていた。中が象徴としての意味を持っていたとなっていた。また、本作において、この髑髏が最も象徴的な意味を持っていると考えられる。お妙の描写は九相図を連想させるが、仏教における髑髏自体が大きな中国思想の中では荘子の髑髏解答を連想させる。このように、本作は古典の文学的伝統や象徴を読者に参照させつつ、本作はハンセン病の描写によって作品に近代的な意味をも持たせている。

Wilt L. Idema, *The Resurrected Skeleton: From Zhuangzi to Lu Xun*（Columbia University Press, 2014）が中国文学における髑髏と骸骨について詳しく述べている。端的に言えば、髑髏と骸骨はしばしば死についての瞑想や短命を意味している。

56　『日本之文華』1890年３月上旬号、挿絵は頁番号記載なし。この挿絵も後藤芳景によるものであるが、『日本の文華』の挿絵と後に幸田露伴（蝸牛庵）『葉末集』（春陽堂、1890）に掲載される挿絵とでは、同じ芳景の作ではあるが微妙に挿絵が異なっている。右を参照。

亭主けゞん顔して暫く考へ、不思議の事を問はるゝものかな、オヽ去年の事なりしが乞食の女あさましく狂ひ〳〵て山深くの方へ入りし事ありしが日光の方へは行かざりしよし、何所へ行しかと今に其噂あり、それを尋ねらるゝか、と云ふに、それ〳〵、其女の様子知るだけ詳しく語れと逼れば、老父苦い顔して我をヂロ〳〵見ながら、年は大凡二十七八、何処の者とも分らず、色目も見えぬほど汚れ垢付たる襤褸を纏ゐ、破れ笠を負ひ掛け足には履物もなく竹の杖によわ〳〵とすがり、談すさへ忌はしきありさま、総身の色薄黒赤く処々に紫色がゝりて怪しく光りあり、手足の指生姜の根のやうに屈みて筋もなきまで膨れ、殊更左の足の指は僅に三本だけ残り其一本の太さ常の人の二本ぶりありて其続きむつくりと甲までふくだみ、右の足は拇指の失し痕かすかに見え、右の手の小指骨もなき如く柔らかそうに縮みながら水を持て気味あしく大きなる蚕のやうなり、左の手は指あらかた落て拳頭づんぐりと丸く、顔は愈々恐ろしく銅の獅子半ば熔ろけたるに似て、眉の毛尽く脱け額一体に凸く張り出して処々凹みたる穴あり、其穴の所の色は極めたる紫の上に溝泥を薄くなすり付たるよりまだ〳〵汚なく、黄色を帯て鼠色に牡蠣の腐りて流るゝ如き膿汁ヂク〳〵と溢れ、其膿汁に掩はれぬ所は赤子の舌の如き紅き肉酷らしく露はれ、鼻柱欠け潰て其所にも膿汁をしたゝか湛え、上唇とろけ去りて疎なる歯の黄ばみたると痩せ白みたる歯齦と互に照り合ひてすさまじく暴露れ、口の右の方段々と爛れ流れたるより頬の半まで引さけて奥歯人を睨まゆる様に見え透き、髪の毛都て亡ければ朱塗の賓頭盧幾年か擦り摩られて減りたる如く妙に光りを放ち、今にも潰え破れんとする熟柿の如く艶やかなるそれさへ見るにいぶせきに、右の眼腐り捨りて是にも膿汁尚乾かず、左の眼の下瞼まくれて血の筋あり〳〵と紅く見ゆる程裏がへり、白眼黄色く灰色に曇り、黒眼は薄鳶色にどんよりとして眼球なかば飛出で、人をも神をも仏をも逆目に睨む瞳子急には動かさず、時々ホッとつく息に満腔の毒を吐くかと覚えて犬も鳥も逃避ける、まして人間は一目見るより胸あしくなり、其あしき臭を飯食ふ折に思ひ出しては味噌汁を甘くは吸ひ得ず、膿汁を思ひ出しては珍重せし塩辛を捨ける、されば誰も彼も握り飯与ふるだけの慈悲もせず其女の為すまゝに任せしに、彼呂律たしかならぬ歌のようなる者をあはれに唸るを聞ば、世に捨られて世を捨てゝ、叱々と、覚束なく細々と繰り返しては息だはしく、ハッタと空を睨みて竹杖ふりあげ、道傍の石とも云はず樹とも云はず打たゝきては狂ひまわり、狂ひ躍ては打たゝき、瞋恚の炎に心を焼き、狂ひ〳〵て行衛しれずなりき、といひぬ。[57]

温泉宿の亭主の話の中にはいくつか興味深い点がある。まずはもちろんハンセン病の扱われ方である。結局、お妙は江戸時代の怪異譚や泉鏡花の「高野聖」とは異なり、

57　幸田露伴『対髑髏』『幸田露伴集　新日本古典文学大系　明治編　22』岩波書店、2002、pp. 285-286。

狐でも狸でもなく、「山姥」のように化けたハンセン病患者の霊であった。作中では先の引用のようにハンセン病の症状が生々しく描写されている。この具体的かつ詳細なハンセン病描写が「山姥」のイメージと合成されているのは、近代におけるハンセン病に対する人々の恐怖が投影されていると考えられる。ハンセン病の病状がこれほど生々しく描かれている例は非常に珍しい。北條民雄の「いのちの初夜」にも詳細なハンセン病描写があることはよく知られているが、露伴は北條の作品よりも前に非常に具体的なハンセン病描写を行っているのである。この生々しい描写によって、お妙は狐ではなく近代の脅威として位置づけられることになるのである。

ここで近代の脅威と表現したが、それは具体的に近代の何に対する脅威だと言えるだろうか。前述したように、英米文学においてハンセン病は植民地がもたらす脅威を暗示していると考えられる。しかし、露伴作品の場合はそれとは異なる。

『対髑髏』で非常に興味深いのは、お妙と若旦那の挿話である。お妙に結婚を申し込んだ若旦那は旧藩の若殿で、ドイツに留学し、近代日本の華族の行く末望み在る方と書かれている。この結婚によってお妙は伯爵夫人になることも出来たのである。それは近代日本における立身出世の夢の実現であり、通常ならばどんな女性もこの縁談を断らないはずである。しかし、お妙はその縁談を断ってしまった。

このお妙の結婚の不承知は、表面上では近代における女性の自由を意味しているようにも読むことができ、近代化における女性の主体化と、貴族社会がそれに対して抱く不安を描いていると解釈することも可能である。

しかし、お妙の話を注意深く読むとそうではないことがすぐにわかる。お妙の母親の手紙の内容は作品の最後で明らかになるが、手紙にはお妙の家族がハンセン病の家系であり、忌まわしい血統の家柄だという告白が記されていたのである。本作が発表された1890年代にはハンセン病が血統の病気だと信じられており、新聞などでも注意が促されていた。そのような同時代的なハンセン病観を踏まえると、若旦那は死んでしまいはしたが、お妙の自己犠牲によってより悲惨な運命から救われたという事になる。もし若旦那がお妙と結婚していれば、若旦那の一族、言い換えれば日本の華族の一部がハンセン病に呪われることになったのである。つまり、本作はお妙が近代日本の貴族制度を救うために自分を犠牲にした話として解釈できるのである。

したがって、本作はハンセン病のモチーフを介して、当時の世間一般の人々が抱く近代化による社会変化への不安を表現していると見なせるのではないだろうか。近代日本が取り憑かれていたのは狐や狸などではなく、家族の血統を隠して社会に進出し、密かに社会を汚染するハンセン病患者であり、本作はそれに対する恐れを描いていると考えられる。明治期に文学作品に描かれたハンセン病表象は、ハンセン病それ自身として描かれるのではなく、常に何か他のものに対する不安を象徴していた。そ

れゆえ本作でも、ハンセン病は近代化による社会変化に対する人々の大きな不安の象徴として描かれていると言えるだろう。

前述した通り、お妙の行動は、表面上では女性の主体化とそれに対して貴族社会が抱く恐れを描いていると解釈することもできる。そう考えると、お妙の結婚の拒絶が彼女の女性としての主体的な選択であったからこそ、お妙は主人公に自分の話をし、それを通じて社会に自分の選択の意味を理解してもらいたがっていたかのようにも読める。しかし、お妙の話を正しく読み取ることができれば、お妙が本当に近代日本に与えた脅威とは、主体化した女性としての脅威ではなく、ハンセン病患者としての脅威であったことがわかる。そのお妙の行動の正しさは、彼女が霊となった後、主人公がその髑髏を埋め、彼女の話を持ち帰って社会に還元したことで証明されることになる。お妙の霊が成仏することができたのはそのためであろう。

また、本作にはハンセン病の病原についての当時の認識の混乱も反映されている。お妙が山に逃げたという事実は、彼女がハンセン病を伝染病と考え、自分で自分を「隔離」したと解釈することも不可能ではないが、お妙の母親の手紙に見える通り、本作のハンセン病の病原認識は遺伝という伝統的なハンセン病の病原論理に基づいていると考えられる。

『対髑髏』発表以後、ハンセン病の病原が未解明であることは探偵小説の大きなプロット・ポイントになっていく。そこでは、ハンセン病を遺伝病とする作品と伝染病として描く作品が混在していた。また、ハンセン病を呪いによる「魔法」と捉える作品[58]や、ハンセン病が腐った血によって発病し、伝染すると描く作品もあった。たとえば、小酒井不木の「直接証拠」（1926年）では、ある博士が借金を返せないために金貸しを殺す[59]。博士は金貸しを殺した際に負傷するが、金貸しがハンセン病患者だったため、博士は自分の血と金貸しの血が混ざったことでハンセン病を発病し、それによって彼が犯人であることが明らかになる。他方、岩田淑郎の「病院をめぐって」（1928年）では、家族にハンセン病患者がいることを隠して病院に勤める看護婦が患者に献血をする。その患者はハンセン病を発病し、復讐として看護婦を殺す[60]。

『対髑髏』やその後の探偵小説からは、日本におけるハンセン病患者の表象が、社会に内在し社会秩序を揺るがす危険の象徴として描かれていることがわかる。『対髑髏』のお妙の場合、彼女は最終的には自分自身を犠牲にして社会を守ろうとしたが、ハンセン病患者の隔離政策が進められていく社会において、お妙は「社会に内在する

58　たとえば、潮慎太郎「癩病の良人に捧げる教授夫人の純愛悲話」『主婦之友』（第22巻４号）には、主人公の旦那が榎の木の悪魔の呪いからハンセン病にかかっており、このように悪魔によってハンセン病にかかるという教訓的な小説もある。
59　小酒井不木『直接証拠』『大衆文芸』1926年４月号、pp. 511-536。
60　岩田淑郎「病院をめぐって」『新青年』1928年８月号、pp. 84-103。

危険者」でもある。その後、文学作品には、岩田が描いた看護婦のように、ハンセン病を隠して生活する患者によって周囲に病気が伝染することへの恐れが描かれるようになっていく。このように、日本の作家がハンセン病患者の表象を通じて描くのは、欧米の作品に描かれるような植民地が本国に与える脅威ではなく、社会の内部から社会秩序を脅かすものへの恐怖だと考えられるのである。

4．英国文学の怪奇小説におけるハンセン病と帝国主義観

日本の大衆文学でハンセン病が描かれたのが1880年代からであったのに対して、欧米文学では1860年代からハンセン病が怪奇小説、探偵小説、紀行文などに描写されるようになった[61]。従来の研究では主に紀行文が注目されてきた。紀行文では、ハワイ・インド・アフリカの植民地が持つ危険性がハンセン病表象を利用して描かれることが多い。そのような紀行文を著した作家には、チャールズ・W・ストッダード（Charles Warren Stoddard, 1843-1909）、ジャック・ロンドン（Jack London, 1876-1916）、ラドヤード・キップリング（Rudyard Kipling, 1865-1936）、ロバート・ルイス・スティーヴンソン（Robert Louis Stevenson, 1850-1894）などがいる。

英語圏のメディアにもハンセン病の記述が登場し、英文学ではハンセン病がしばしば植民地の問題として描かれた。例えば、ラドヤード・キップリングの短編小説「獣の印」（1890、1932年『新青年』に安田専一の翻訳が発表）では、インド人の患者に呪いをかけられたイギリス人がハンセン病にかかる。この時代のハンセン病を扱う英米小説は概ね三つに分類することが出来る。その中でも最も多いのは小説の形式で書かれた紀行文である。

ハンセン病を描いた紀行文の中でも最も有名なのは、ジャック・ロンドンやチャールズ・W・ストッダードの作品である[62]。紀行文の他には冒険小説や探偵小説もある。これにはロバート・ルイス・スティーヴンソンの「小瓶の悪魔」（The Bottle Imp, 1891）やサー・アーサー・コナン・ドイル（Sir Arthur Conan Doyle, 1859-1930）のシャーロック・ホームズシリーズなどの作品がある。それらに加え、少数ではあるが

61　ハンセン病と欧米文学の旅行記については、ロッド・エドモンドの研究が最も詳しい。また、Gregory Tomsoがハンセン病とアメリカ・イギリス文学の紀行文学といわゆる性的逸脱行為について論じてきた。スーザン・バーンズの研究にはハンセン病と日本の探偵小説を扱った論文もある。“Making Illness into Identity: Writing “Leprosy Literature” in Modern Japan,” （*Japan Review* 16（2004）: pp. 191-211）を参照。

　また、日本文学における大衆文学とハンセン病の描写の利用については、細川涼一の研究を参照。拙著「日本、欧米大衆文学におけるハンセン病と優生学」（『ノーマライゼーション』31第355号、2011年２月、pp. 16-19）でもこの問題を扱った。

62　これらの作品については、本稿の付録を参照。

ハンセン病は怪奇小説にも登場している。これにはアルジャーノン・ブラックウッド（Algernon Henry Blackwood, 1869–1951）の「幻の下宿人」（The Listener, 1907）や、先のラドヤード・キップリング（Rudyard Kipling, 1865–1936）の「獣の印」（The Mark of the Beast, 1890）、ヘスキス・プリチャード（Hesketh Prichard, 1876–1922、ペンネームは H. Heron）の「ハマースミス『スペイン館』事件」（The Story of the Spaniards, Hammersmith, 1917）がある。日本よりも欧米文学の方がハンセン病を扱う作品が多いと言える。

先に挙げた怪奇小説では、すべて、植民地の原住民に接触した人物がハンセン病にかかっている。日本の作品のように、性欲にもとづく接触からハンセン病にかかるだけではなく[63]、英米の作品には植民地に住むネイティブの人々と接触することでハンセン病にかかる描写もある。このような形でハンセン病を描いた最も有名な作品として、アーサー・コナン・ドイルによるシャーロック・ホームズシリーズの「白面の兵士」（The Adventure of the Blanched Soldier、1926年11月号）がある[64]。シャーロック・ホームズシリーズ中で、この作品を含めた二作品だけがワトソンではなくホームズ自身の視点から語られている[65]。同作では、南アフリカのボーア戦争（1899–1902）から帰還した兵士が、ホームズに、友人のゴッドフリー・エムズワース大佐の家族事情を調べてほしいと依頼する。大佐はエムズワース一家の私有地にある小屋で捕虜にされていると言う。ホームズは、大佐がアフリカでハンセン病にかかったと推定し、熱帯医学者を連れて調査を行う。結果としてホームズの推測は当たっていた。大佐は戦争で負傷し、植民地の民族の小屋に避難して一晩を過ごしたが、その翌朝になってそこがハンセン病のコロニーだったことを知る。その後、皮膚病になった大佐はハンセン病だと疑われ、イギリスのハンセン病患者の隔離政策を避けるために、家族の私有地にある小屋に身を隠すことにした。しかし、ホームズと同行した熱帯医学者が診断したところ、大佐はハンセン病ではなく、「擬似癩」と呼ばれる魚鱗癬だったことがわかる[66]。これにより事件も解決し、大佐の隔離も解消され、大佐が植民地でかかったと思われたハンセン病は罹患の事実がなかったということで無力化される。

このような、植民地に由来するハンセン病の脅威が帝国主義内部にやって来て無力

63　性欲によってハンセン病にかかったとする作品もあるが、英米文学ではそのようなパターンは非常に少ない。チャールズ・W・ストッダードは異常な性欲によってハンセン病になるハワイの原住民を描いている。性欲とハンセン病については Tomso の文献を参照。

64　Conan Doyle, Arthur, “The Adventure of the Blanched Solider,” in: The New Annotated Sherlocke Holmes: Volume II. W. W. Norton & Company, 2005: pp. 1482–1507。コナン・ドイル「白面の兵士」、『シャーロック・ホームズ全集　19　赤い輪』小池茂・高山宏・高田寛訳、東京図書株式会社、1983：pp. 147–190。

65　Klinger, Leslie S. “The Adventure of the Blanched Solider,” Notes. In: Conan Doyle, *The New Annotated Sherlocke Holmes: Volume II*, p. 1482.

66　コナン・ドイル「白面の兵士」、p. 189。

化するという展開は「白面の兵士」だけのものではない。ヘスキス・プリチャードと彼の母が共著した「ハマースミス『スペイン館』事件」（またはＥ＆Ｈ・ヘロン「スパニアード館物語」[67]）（The Story of the Spaniards, Hammersmith, 1917）にも同じようなパターンの展開が描かれる[68]。本作では、超心理学探偵者の主人公のフラクソマン・ロー（Flaxman Low）が、ロデリック・ヒューストンという友人に呼ばれ、ロデリックの叔父が相続したハマースミスにあるスパニャードズ館の凄惨な幽霊屋敷を調査する。フラクソマン・ローはスパニャードズ館を初めて見た際に、「この極めて英国らしい家にはどうも妙に熱帯地方の印象があるなと思った[69]」（"...this intensely English house still gave some curious suggestion of the tropics."）と述べている[70]。この英国らしい屋敷は植民地の影響を受けている。屋敷自体が南太平洋の民族の家屋を模している上、室内の装飾物はすべて熱帯地方の建築の影響を受けていた。

ローの調査では、幽霊には足の変形が見られ、皮膚は黄色くなり、顔も獅子面になっていると述べられている。ローは、幽霊の正体が、現在この屋敷に住む友人ロデリックの叔母の夫、つまりロデリックの血のつながらない叔父だと推測する。その叔父はヴァンニューセンという不道徳な老人だったことが明らかになる。ヴァンはトリニダード島に砂糖園を所有し、健康を害してイギリスに帰ったとされている。ロデリックは状況を次のように説明した。「彼はトリニダードに砂糖園を持っていて、そこで生涯の大半を過ごしていたが、彼の妻はほとんどイギリスにとどまっていた―気性が合わなかったと言われている。彼が永住のために本国へ帰って来てこの家を建てた時も夫婦は別居生活をしていて、僕の叔母はどんなことがあろうとも彼の元へは戻らないと言い切っていた。そのうち彼は長患いの慢性病人となって、ぜひ一緒に暮らしてくれるよう叔母に強要した。叔母がここで暮らしたのは一年ぐらいのものだったろうか、ある朝―あの君の部屋のベッドで死んでいるのが発見されたんだ。[71]」（"He owned sugar plantations in Trinidad, where he passed the greater part of his life, while his wife mostly remained in England—incompatibility of temper it was said. When he came home for good and built this house they still lived apart, my aunt declaring that nothing on earth would persuade her to return to him. In the course of time he became a confirmed invalid, and then he insisted on my aunt joining him. She

67　Ｅ＆Ｈ・ヘロン「スパニアード館物語」『シャーロック・ホームズのライバルたち②』早川書房、2000：pp. 139-162。
68　Heron, E. and H. "The Story of the Spaniards, Hammersmith," in: *Ghost Stories*, C. Arthur Pearson Limited, 1917: pp. 1-20.
69　Ｅ＆Ｈ・ヘロン「スパニアード館物語」『シャーロック・ホームズのライバルたち②』早川書房、2000：p. 146。
70　Heron, E. and H. "The Story of the Spaniards, Hammersmith," p. 4.
71　Ｅ＆Ｈ・ヘロン、p. 148。

lived here for perhaps a year, when she was found dead in bed one morning—in your room.”[72])

ローは超心理学の視点で事件の真相を追究し、ヴァンニューセンがハンセン病を患い、妻を殺した後に自殺したことを明らかにする。ヴァンニューセンが屋敷の幽霊となった理由は、彼の亡骸が発見されていないからだとローは推測する。最終的にヴァンニューセンの亡骸はスパニャードズ館を壊す際に発見され、その骸骨から彼がハンセン病だったことが判明する。

この作品では幽霊と医学が二つの方法で結びつけられている。一つ目は、フラクソマン・ローが超心理学者であるという設定である。このような超常現象研究家は20世紀末に現れるようになった。二つ目は、幽霊がハンセン病であるという設定である。本作ではヴァンニューセンが幽霊になったのはハンセン病に罹ったためではなく、妻の殺害という不道徳な行為によるものだと描かれている。本作におけるハンセン病は、ヴァンニューセンの植民地における行為の象徴として描かれていると言える。さらに、ハンセン病は、ヴァンニューセンがこの屋敷で自分を社会から隔離し、妻が夫と一緒に住むことを拒絶する理由ともなっていた。ローが語る調査結果では、ハンセン病の危険性が家庭を崩壊させ、またヴァンニューセンが妻を殺害した要因にもなったとされている。ローは、現在屋敷に住む友人がヴァンニューセンの血縁者ではなく、結婚によりヴァンニューセンの甥になったことを確認してから事件の真相を語る。最後には、イギリスと南太平洋の文化が混在した屋敷を壊すことで、象徴的な意味で植民地が本国にもたらした危険性を消滅させるに至っている。

次に、植民地となった熱帯地や南アジアの国の民族との日常的な接触により入植者がハンセン病を発病する展開を持つ作品の一例を見ていきたい。アルジャーノン・ブラックウッドの「幻の下宿人」（The Listener, 1907）は、貧しい作家の生活を日記形式で描く作品である[73]。主人公の作家は貧乏であるため、ロンドンで最も経済的な部屋を借りる。その部屋に引っ越して間もなく、作家は不思議な雰囲気を感じ、奇妙な音を聞くようになる。また、猫が群れになり沈黙のまま作家を凝視することもあった。一ヵ月経つと、自分の物が知らない間に動いていることに気がついた。また、理由もなく怒り出したくなったり、圧迫を感じたりすることもあった。自分の考えでないことを書きだしたりもした。誰もいないのに戸が叩かれる音もする。最も憂慮すべきことには、部屋の扉の外で絶えず誰かが室内の音を聞いている気がしてくる。さらにもう少し経つと、夜中に手で触られているような感じがし、部屋の中で足音を聞くよう

72　Heron, E. and H., pp. 5–6.
73　Blackwood, Algernon, “The Listener,” in: *Three Supernatural Classics*, Dover Publications, Inc., 2008: pp. 103–131.

になり、強烈な悪臭もするようになっていく。

そして、ある晩衣服を物乞いする男の夢を見てから目を開けると、作家自身の服が部屋に散乱していた。作家は、部屋の音を盗み聞き、悪臭を放つ人物を捕まえようとするが失敗する。そのさなか、作家は東アジアから帰国したチャプターという友人と会う予定を立てる。チャプターと会う前日、作家はようやく自分の部屋の音を聞く人物に出会うが、そのあまりにも恐ろしい顔と忌まわしい悪臭に卒倒してしまう。意識が戻り、チャプターを探しに行ったところ、チャプターは作家に、作家の部屋に以前住んでいた人物は、チャプターが東アジアで会ったブラウントという友人だったことを教える。チャプターによると、ブラウントはハンセン病にかかり、病が続くことに耐えられなくなり自殺したという。

本作には、ハンセン病を患ったブラウントがイギリスで熱帯地からの見世物になっていたことが語られる場面がある。チャプターはブラウントの病気について作家に語る中で、「だって君、戸口まで大勢の人が後に付いてきて、窓下に立って、顔を一目でも見ようとしたって言うんだから[74]」（“A crowd had been known to follow him up to the very door, and then stand below the windows in the hope of catching a glimpse of his face”）と述べている[75]。

ブラウントが他のハンセン病を描く小説の登場人物と異なっている点は、ハンセン病が医学的に治療ができる病気だと述べているところである。チャプターがハンセン病は伝染病ではないと述べたため、ブラウントは病院での医療を断ることができた。チャプターも次のように述べている。「あの病気は接触感染しないから、本人が望まんものを追い立てることはできない[76]」（“You know, they say it’s *not* contagious, so there was nothing to prevent his staying here if he wanted to.”[77]）接触感染は否定されているにしても、不治の病が伝染することへの恐れは描かれていると言える。このようにブラウントがまだ病の名を告げていないことが物語の緊張感を高めていく。

ブラウントは作家が今いる部屋に二年間住み、病気が悪化するなか必死に医学を勉強して自身で治療を行おうとしたが、足を失い、顔も恐ろしくなり、臭いも悪化していった。そうして、彼は結局ハンセン病の呪いに耐えられなくなり自殺した。本作はメロドラマのように結末でようやく病名を明かす。

僕は手を上げ、それ以上焦らされるのに我慢できず、僕は叫んだ。「その男の病気って、

74　アルジャナーン・ブラックウッド「幻の下宿人」、『死を告げる白馬』樋口志津子、朝日ソノラマ、1986、p. 78。
75　Blackwood, p. 131.
76　ブラックウッド、p. 78。
77　Blackwood, p. 131.

何なんだ、早く言っておくれ」

「知っているとばかり思っていた！」チャプターは、信じられぬとばかり目を見張った。

「知っているとばかり！」

それから、前屈みに身を集り出すと、二人の目が合った。ほとんど聞き取れぬ小声で、口にするも憚っているようだった。

「レプラだったんだ！」[78]

（“Then, in Heaven’s name!” I cried, unable to bear the suspense any longer, “tell me what he had, and be quick about it.”

“I thought you knew!” he exclaimed with genuine surprise. “I thought you knew!”

He leaned forward and our eyes met. In a scarcely audible whisper I caught the words his lips seemed almost afraid to utter:

“He was a leper!”[79]）

このメロドラマ的な暴露にはチャプターたちの抱くハンセン病への恐れが表れている。伝染する恐れはないはずだが、ここにはハンセン病の名を口に出すのも憚るほどの強い恐怖が描かれている。

この小説を支える原動力は、ハンセン病患者の精神的苦痛である。ブラウントは『対髑髏』のお妙と同じように自身を社会から隔離したと考えられる。さらに、二人とも周囲の見世物になった後で社会から姿を消している点でも共通している。ブラウントはハンセン病によって近所の見世物となったが、死後は彼が主人公の作家の観察者となり、作家にブラウントが経験したものと同じ絶望を与えようとしている。さらに、作家を精神的に苦しませることで自身が経験した精神的苦痛も伝染させようとしていた。本作では『対髑髏』と同じく、ブラウントの話を理解する人物が登場し、彼の内面を社会に伝える方途が生まれることによって、作家の精神的苦痛の治療ができる可能性も開かれていく。

最後に、帝国主義とハンセン病を扱う小説の中でも最も有名な作品を見ていきたい。ラドヤード・キップリングの「獣の印」（The Mark of the Beast, 1890）は、幸田露伴の『対髑髏』と同じ1890年に、雑誌『Pioneer』に掲載された[80]。本作におけるハンセン病患者は、呪いの原因であるとともに呪いの治療者でもあるという位置づけ

78　ブラックウッド、p. 78–79。
79　Blackwood, p. 131.
80　翻訳したものであるキップリング・J・R「獣の印」橋本槇矩訳『世界幻想文学大全　怪奇小説精華』筑摩書房、2012、pp. 464–484がある。また、原文は Kipling, Rudyard, “The Mark of the Beast,” in: *The Mark of the Beast and Other Stories*, Signet Classics, 1964, pp. 43–56。

を与えられている。この作品には、語り手の「私」と、ストリックランドとフリートというインドに住むイギリス人男性が登場する。フリートはインドの文化に無知で、激しい気性の持ち主として描かれている。12月31日、イギリス人男性たちがクラブに揃った日の帰り道、酔ったフリートは、猿の神ハヌマンの寺院で神の像を使って葉巻をもみ消す。すると、ハンセン病を患う銀色の男がフリートを抱き、彼に噛みついて印をつけた。

この男の描写は次の通りである。「すると突然、何の予告もなくひとりの銀色の肌の男が、神像の背後の奥まったところから出てきた。男はこの厳寒にもかかわらず丸はだかで、身体はつや消しした銀のように光っていた。かれは聖書に言う雪のやうに白い（癩）病患者であった。罹病して何年もたつ重い患者であるため、顔は崩れて、目鼻もはっきりしなかった。」[81]（“Then, without any warning, a silver man came out of a recess behind the image of the god. He was perfectly naked in that bitter, bitter cold, and his body shone like frosted silver, for he was what the Bible calls a “leper as white as snow.” Also he had no face, because he was a leper of some years' standing, and his disease was very heavy upon him.”[82]）作中でこの異様な男は一回も声を出さない。ただ、「オットセイの鳴き声にそっくりの声」[83]（“making a noise exactly like the mewing of an otter”[84]）が続くだけである[85]。そして、英語ではこの男の皮膚の奇妙な白さを強調するために「銀色の男」と表現されている。つまりこの銀色の男も、『対髑髏』のお妙と同じで、人間か否かわからない曖昧な存在として描かれているのである。またこの「銀色」とはハンセン病の症状によるものでもあり、ハンセン病にかかると皮膚が赤くなったり白くなったりすることがあるためである。

しばらくすると、フリートは獣に変化し出し、生肉を食べたり、家の中にいられなくなって庭を徘徊したりする。最終的に、フリートは遠吠えする怪物となり、ストリックランドたちはフリートが荒野に逃げられないように彼をつないでおく。そして、呪いをかけた銀色の男を捕まえ、「ストリックランドはしばらく両手を眼の上にかざしていた。われわれは仕事にとりかかった。これ以上は書くべきではないだろう」[86]（“Strickland shaded his eyes with his hands for a moment and we got to work.

81 J・R・キップリング「獣の印」、橋本槇矩訳『世界幻想文学大全　怪奇小説精華』筑摩書房、2012、p. 467。
82 Kipling, Rudyard, “The Mark of the Beast,” in: *The Mark of the Beast and Other Stories*, Signet Classics, 1964, p. 45.
83 キップリング、p. 468。
84 Kipling, p. 45.
85 キップリング、p. 480。
86 Kipling, p. 54.

This part is not to be printed”[87]）と書かれており、彼らは銀色の男を痛めつけている。ストリクランドたちが銀色の男に行う残虐な行為の理由は次のように語られている。「そのときふと私が思ったのは、われわれはこの部屋で［銀色］の男とフリートの魂を奪いあったのだということと、英国人として永久におのれをはずかしめてしまったのだということであった。そう思うと私は笑い出さずにいられず、ストリックランドと一緒に恥も外聞もなく笑いこけたのである。[88]」（“Then it struck me that we had fought for Fleete’s soul with the silver man in that room and had disgraced ourselves as Englishmen forever, and I laughed and gasped and gurgled just as shamefully as Strickland, while Fleete thought we had both gone mad. We never told him what we had done.”[89]）ハンセン病の銀色の男は、ストリックランドらのこの残虐な行為に耐えられなくなってフリートの呪いを解き、フリートは元に戻ることができた。

キップリングのこの作品では、ハンセン病を通じて、植民地が持つ最も大きな危険が表現されている。ハンセン病の銀色の男はフリートを抱く直前まで隠れていた。作品の最初から最後までこの男は一つも言葉を発することはなく「ニャーと鳴く」だけであるが、彼の行動によってイギリス人たちは文明国人でなくなるのである。まず、イギリス人のフリートが獣と化す。そして、フリートを救うため銀色の男に接してある意味で“獣”となった主人公たちの描写は、ハンセン病を病まずとも、ハンセン病と接触することさえあれば、人々が何らかの脅威にさらされる危険性があることを描いている。本作は、ハンセン病のモチーフを利用し、植民地が文明社会の脅威になり得るということを表現しようとしていると考えられるのである。

5．結論

1890年代から、日本・アメリカ・イギリスの大衆文学にハンセン病というテーマが現れてくるようになる。特に探偵小説や怪奇小説には、同時代のハンセン病の原因への認識と、ハンセン病がどのような社会への脅威や人々の恐怖の反映として描かれていたかが表れている。しかし、日本文学と欧米文学とでは、社会の脅威となるものの内実が大きく異なっていた。日本文学でのハンセン病は社会に内在する脅威を表していたが、イギリス文学では植民地からもたらされる脅威を表現していた。また、日本文学でも英語圏文学でも、ハンセン病の病原への認識や治療方法への言及には、当時

87　同書、p. 54。
88　キップリング、pp. 483–484。
89　Kipling, p. 56。1932年に出版された日本語訳ではこのイギリス人が自分の罪を反省する箇所が削除されている。

の多様なハンセン病への認識が反映されていた。ただ、英語圏の文学が描くハンセン病は、同時代の植民地への態度を反映し、人種論や病気源論の影響も受けていた。つまり、ハンセン病は植民地の病気であり、文明国の病気ではないという発想が小説の中に明確に描かれていた。

怪奇小説では、幽霊の解放（物語の解決）により、物語の中でハンセン病がどのような役割を果たしたのかを分析することが大きな意味を持つ。当時のハンセン病は、幽霊と同じように十分な説明ができない曖昧なものであった。伝統的な医学でも近代医学でも説明や治療が行えなかったことがハンセン病を深い意味を持つメタファーにしたと言える。特に、幽霊が登場する怪奇小説では、ハンセン病が社会に対する脅威や社会変化に対する人々の恐怖や不安のメタファーとなっていたことがわかる。

このように、国や地域に関わらず、どのような社会でも、あるいはそこでどのような認識論において、ハンセン病は未解明の恐ろしい病なものとして捉えられ、それぞれの時代の中での人々の恐怖や不安を反映するメタファーとして、文学作品、特に怪奇小説に現れていたと言えるのである。

参考文献

和書

・荒井祐樹・山下道輔編『「癩」を扱ったミストリー小説～戦前編～』2004（国立ハンセン病資料館に保管）
・岩田淑郎「病院をめぐって」『新青年』1928年８月号、84-103頁
・仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』東京堂、1926
・柄谷行人『定本　柄谷行人集第一巻』岩波書店、2004
・河盛好蔵「幸田露伴集解説」『幸田露伴集　日本近代文学大系　第６巻』角川書店、1974：8-34頁
・木岡伸夫・鈴木貞美編『技術と身体―日本「近代化」の思想』ミネルヴァ書房、2006
・キップリング・R「獣の斑点」『新青年』第13巻３号1932新春増刊号、186-196頁
・キップリング・J・R「獣の印」橋本槇矩訳『世界幻想文学大全　怪奇小説精華』筑摩書房、2012、464-484頁
・栗山茂久・北澤一利編『近代日本の身体感覚』青弓社、2004
・幸田露伴『対髑髏』『幸田露伴集　新日本古典文学大系　明治編　22』岩波書店、2002
・小酒井不木『直接証拠』『大衆文芸』1926年４月号、511-536頁
・小林丈広『近代日本と公衆衛生―都市社会史の試み』雄山閣出版、2001
・コナン・ドイル「白面の兵士」、『シャーロック・ホームズ全集 19　赤い輪』小池茂・高山宏・高田寛訳、東京図書株式会社、1983：147-190頁
・潮慎太郎「癩病の良人に捧げる教授夫人の純愛悲話」『主婦之友』第22巻４号1938年４月：244-255頁
・新村拓『健康の社会史―養生、衛生からの健康増進へ』法政大学出版局、2006

・鈴木晃仁「『江戸怪談集』より精神医学史・医学史関連のメモ」
http://akihitosuzuki.blog.fc2.com/blog-entry-2637.html　最終閲覧日：2016年２月21日
・関谷博「初期露伴の文学的課題」『幸田露伴集　新日本古典文学大系　明治編　22』岩波書店、2002、pp. 533-543
・スーザン・ソンタグ『隠喩としての病い；エイズとその隠喩』富山太佳夫訳、みすず書房、2012
・高田衛編・校注『江戸怪談集（上)』［全３冊］山容社、1989、pp. 120-121
・＿＿＿＿＿＿『江戸怪談集（中)』［全３冊］山容社、1989、pp. 178-180
・滝尾英二『朝鮮ハンセン病史―日本植民地下の小鹿島』未来社、2001
・徳田武「「対髑髏」と『雨月物語』・西鶴・『荘子』」『明治大学教養論集172』pp. 47-63
・田中キャサリン「ロイス・ジョンソン・エリクソン夫人と長田穂波―キリスト教宣教師と癩文学の普及」『大手前大学論集第15号』2015
・坪井秀人『感覚の近代　声・身体・表象』名古屋大学出版会、2006
・出口智之『幸田露伴の文学空間―近代小説を超えて』青簡舎、2012
・ジャック・デリダ『マルクスの亡霊たち』増田一夫訳、藤原書店、2007
・登尾豊『幸田露伴論考』学術出版会、2006
・ツヴェタン・トドロフ『幻想文学論序説』渡辺明正・三好郁朗訳、元ライブラリー：東京創元社、1999
・ダイアナ・ドナス「幸田露伴の作品における哲学的思想と観念論」『實踐國文學　82』2012、53-68頁
・廣川和歌『近代日本のハンセン病問題と地域社会』大阪大学出版会、2011
・宝月理恵『近代日本における衛生の展開と受容』東信堂、2010
・福田眞人『結核の文化史』名古屋大学出版会、1995
・アルジャナーン・ブラックウッド『死を告げる白馬』樋口志津子、朝日ソノラマ、1986
・細川涼一「探偵小説とハンセン病―国枝史郎・小栗虫太郎・橘外男」仏教（50）2000、122-129頁
・＿＿＿＿「ハンセン病と勃興期の探偵小説―正木不如丘と小酒井不木」部落解放（495）2002、40-49頁
・三浦清宏『近代スピリチュアリズムの歴史』講談社、1994
・カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』植村邦彦訳、平凡社、2008
・安田義明「泉鏡花「高野聖」―露伴『対髑髏』との比較的論に」『滝川国文　12』1996、1-20頁
・「『らい文献目録　社会編』等のリスト」『日弁連法務研究財団ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書　資料編』2005

洋書

・Anderson, Warwick, *Colonial Pathologies: American Tropical Medicine, Race, and Hygiene in the Philippines*, Duke University Press, 2006.
・Blackwood, Algernon, “The Listener,” *Three Supernatural Classics*, Dover Publications, Inc., 2008, pp. 103-131.

・Bourdaghs, Michael. *The Dawn That Never Comes: Shimazaki Toson and Japanese Nationalism*, Columbia University Press, 2010.

・Burns, Susan L., "From 'leper villages' to leprosaria: Public health, nationalism and the culture of exclusion in Japan," in *Isolation: Places and Practices of Exclusion*, edited by Carolyn Strange and Alison Bashford, Routledge, 2003, pp. 104–118.

・_____, "Making Illness into Identity: Writing "Leprosy Literature" in Modern Japan," *Japan Review* 16 (2004), pp. 191–211.

・_____, "Rethinking "Leprosy Prevention:" Entrepreneurial Doctors, Popular Journalism, and the Civic Origins of Biopolitics," *Journal of Japanese Studies* 38 (2), 2012, pp. 301–327.

・Conan Doyle, Arthur, "The Adventure of the Blanched Solider," in *The New Annotated Sherlocke Holmes: Volume II*. Leslie S. Klinger, ed with notes. W. W. Norton & Company, 2005, pp. 1482–1507.

・Derrida, Jacques, *Specters of Marx*, trans. Peggy Kamuf. Routledge, 1994.

・Donath, Diana, "Buddhist and Daoist mysticism in Koda Rohan's works," *Asiatische Studien: Zeitschrift der Schweizerischen Asiengesellschaft* 52 (1998), pp. 1059–1068.

・_____, "Philosophical Thought and Idealism in the Works of the Great Meiji Author Kōda Rohan." *SILVA IAPONICARUM* 29 (30) (Fall 2011), pp. 11–32.

・Edmund, Rod, *Leprosy and Empire,* Cambridge University Press, 2006.

・Figal, Gerald, *Civilization and Monsters: Spirits of Modernity in Meiji Japan*, Duke University Press, 1999.

・Gussow, Zachery, *Leprosy, Racism, and Public Health: Social Policy in Chronic Disease Control,* Westview Press, Inc., 1989.

・Frühstück, Sabine, *Colonizing Sex: Sexology and Social Control in Modern Japan*. Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 2003.

・Handley, Sasha, *Visions of an Unseen World: Ghost Beliefs and Ghost Stories in Eighteenth-Century England*. Pickering & Chatto, 2007.

・Heron, E. and H., "The Story of the Spaniards, Hammersmith," in: *Ghost Stories*, C. Arthur Pearson Limited, 1917: pp. 1–20.

・Idema,Wilt L., *The Resurrected Skeleton: From Zhuangzi to Lu Xun*. Columbia University Press, 2014.

・Johnston, William, *The Modern Epidemic: A History of Tuberculosis in Japan* (Harvard University Press, 1995.

・Kipling, Rudyard, "The Mark of the Beast," in: *The Mark of the Beast and Other Stories,* Signet Classics, 1964: pp. 43–56.

・Koda, Rohan, *Pagoda, Skull, and Samurai: Three Stories by Koda Rohan*, trans. Chieko Irie Mulhern, Charles E. Tuttle Company, 1985.

・_____, *Begegnung mit einem Totenschädel: Zwei Novellen aus dem Japan der Jahrhundertwende*, trans. Diana Donat, edition q, 1999.

・Inglis, Keri, *Ma'i Lepra: Disease and Displacement in Nineteenth-Century Hawai'i*, University of Hawai'i Press, 2013.

・Leung, Angela Ki Che, *Leprosy in China: A History*, Columbia University Press, 2009.

・Marran, Christine L. Marran, *Poison Woman: Figuring Female Transgression in Modern Japanese Culture*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 2007.
・Moran, Michelle T., *Colonizing Leprosy: Imperialism and the Politics of Public Health in the United States,* The University of North Carolina Press, 2007.
・Silver, Mark, *Purloined Letters: Cutural Borrowing and Japanese Crime Literature, 1868-1937*, Honolulu: University of Hawai'i Press, 2008.
・Tanaka Kathryn, "Through the hospital gates: Hansen's Disease and modern Japanese literature," Doctoral dissertation, University of Chicago, 2012.
・Tanaka, Stefan, *New Times in Modern Japan*. Princeton University Press, 2004.
・Tomso, Gregory, "The Queer History of Leprosy and Same-Sex Love," *American Literary History*, 14(4), 2002: pp. 747-775.
・Tzvetan, Todorov, *The Fantastic: A Structural Approach to a Literary Genre*, trans. Richard Howard, The Press of Case Western University, 1973.

ハンセン病と1946年以前の日本、欧米大衆文学の部分的なリスト[90]

ハンセン病を扱う英語圏の大衆文学

＊印は日本語訳あり

①小説化された紀行文学

＊ Charles Warren Stoddard, “Joe of Lahaina,” 1873; “Father Damien Among His Lepers,” 1909; *The Lepers of Molokai*, 1908
Herbert Tichborne (“Sundowner”), “A Maori Girl’s Revenge,” 1901
＊ Jack London, *The Cruise of the Snark*, 1919
＊ Mark Twain, *Following the Equator: A Journey Around the World*, 1897
Charmian Kittredge, *Jack London and Hawaii*, 1918
Fanny Van de Grift Stevenson, “The Half-White,” 1891
Robert Louis Stevenson, “Father Damien,” 1895
＊ W. S. Maugham, *The Moon and Sixpence*, 1919
John Farrow, *Damien the Leper*, 1937

②冒険小説／探偵小説

＊ Jack London “Koolau the Leper”（「ハンセン病患者クーラウ」）“Good-by Jack,”（「さよなら、ジャック」）“The Sheriff of Kona”（「コナの保安官」）1909
＊ Sir Arthur Conan Doyle, “The Adventure of the Blanched Soldier”（「白面の兵士」）1926
Richard Sale, *Cardinal Rock*, 1940; *Lazarus #7*, 1942

③ゴーストストーリー／怪奇小説／怪談

＊ Rudyard Kipling, “The Mark of the Beast”（『獣の痕跡』、『獣の印』、『獣のしるし』、『けだものの印』など複数の翻訳がある）1890
＊ Robert Louis Stevenson, “The Bottle Imp”（『小瓶の悪魔』、『びんの悪魔』、『壜の小鬼』、『瓶の妖鬼』など複数の翻訳がある）1893
＊ Algernon Blackwood, “The Listener”（『幻の下宿人』）1907
＊ Hesketh V. Pritchard, “The Story of the Spaniards, Hammersmith”（『スペニアード館物語』、『ハマースミス『スペイン館』事件』、翻訳が２作ある）1917

90　本付録は、「『らい文献目録　社会編』等のリスト」『日弁連法務研究財団ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書　資料編』（2005）を参照しつつ、自ら見つけた作品を加えて作成した。

ハンセン病を扱う日本語圏の大衆文学

①怪談

「人の魂、死人を喰らふ事　付精魂、寺へ来たる事」『片仮名本・因果物語』1661
「鼠、人を食ふ事」『宿直草』1677

②婦物語

仮名垣魯文　『高橋阿伝夜叉譚』1879
岡本起泉　『其名も高橋毒婦の小伝 東京奇聞』1879
河竹黙阿弥　『綴合於伝仮名書』1879（歌舞伎）

③明治物語

幸田露伴　『対髑髏』　1890年（疑問あり）
尾崎紅葉　『巴波川』　1890年（疑問あり）
生田葵山　『団扇太鼓』1899年

④探偵小説：罪とセンセーショナルなハンセン病が描かれた

小酒井不木　『直接証拠』1926
高山菊次郎　「意外な結果」　『スター』1926
木下宇陀児　「星史郎懺悔録」『新青年』1928
山本禾太郎　「小坂町事件」　『新青年』1928
岩田淑郎　「病院をめぐる」『新青年』1928
米田三星　「告げ口心臓」　『新青年』1931
南沢十七　「人間剥製師」　『新青年』1933
渡邉文子　「復讐の書」　『新青年』1933
渡辺啓助　「吸血花」　『新青年』1934
木木高太郎　「青色鞏膜」　『新青年』1935
西尾正　「土蔵」『ぷろふいる』1935
渡辺啓助　「癩鬼」『ぷろふいる』1935
小笠原正太郎「癩人」『ぷろふいる』1936

④自然主義小説：病気による家族の崩壊、社会差別について描かれた作品

江口渙　「蝦蟇」『星座』1917；「馬丁」『新潮』1919
森田草平『輪廻』1926

⑤感傷主義小説：患者の不幸や病気による悲劇を描いた作品

正宗白鳥「人さまざま」『中央公論』1921
横光利一「馬車」『改造』1932
賀川豊彦『東雲は輝く』1933
久米正雄『光の漣』1937